

最近の症例から (19) —咬筋部勃起性血管腫—

多武保明宏，山本雅也，黒岩博子

松本歯科大学 口腔外科学第2講座（主任 山岡 稔 教授）

井口光世

諏訪湖畔病院 歯科口腔外科（主任 井口光世 部長）

患者：23歳 女性。

初診：平成6年7月22日。

主訴：右側頬部の膨隆。

家族歴および既往歴：特記すべき事項なし。

現病歴：平成2年頃より右側頬部の膨隆に気づいていたが、大きな障害が無いため放置していた。

その後、膨隆が徐々に増大してきたために某歯科医院を受診し、当科を紹介され来院した。

現症

全身所見：体格中等度，栄養状態良好にて他に特記すべき事項なし。

局所所見：下顎安静位では，顔貌左右ほぼ対称性であったが，咬みしめ時に右側咬筋部に拇指頭大

の膨隆を認めた（写真1）。膨隆部は直径約2 cm大の境界明瞭な類円形，弾性軟で，拍動は認めなかった。また，両側顎下リンパ節は大豆大を各一個ずつ触知し，可動性で圧痛を認めなかった。口腔内においては腫瘤を触知せず，唾液の分泌も正常であった。

臨床検査所見：特記すべき事項なし。

画像所見：

単純X線所見：異常所見は認めなかった。

超音波断層像所見：右側咬筋部と皮下の間において，15×15×5 mm程度の境界不明瞭で内部が比較的均一な低輝度領域を認めた（写真2）。

MRI所見：T₁強調像では，腫瘤部は皮下脂肪より低信号で，咬筋組織とはほぼ同信号を呈し境界は不明瞭であった（写真3-A）。T₂強調像においては高信号を呈し，境界明瞭で咬筋部と皮下の間を認めた（写真3-B）。

臨床診断：右側咬筋部勃起性血管腫



写真1：初診時顔貌写真（咬みしめ時）

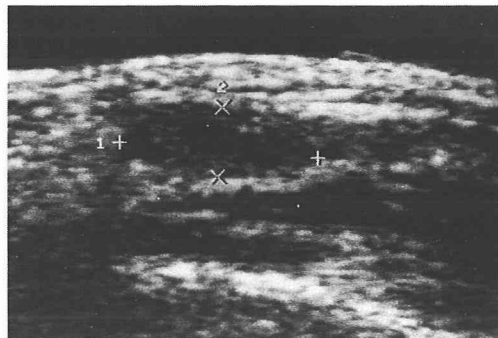


写真2：超音波断層像

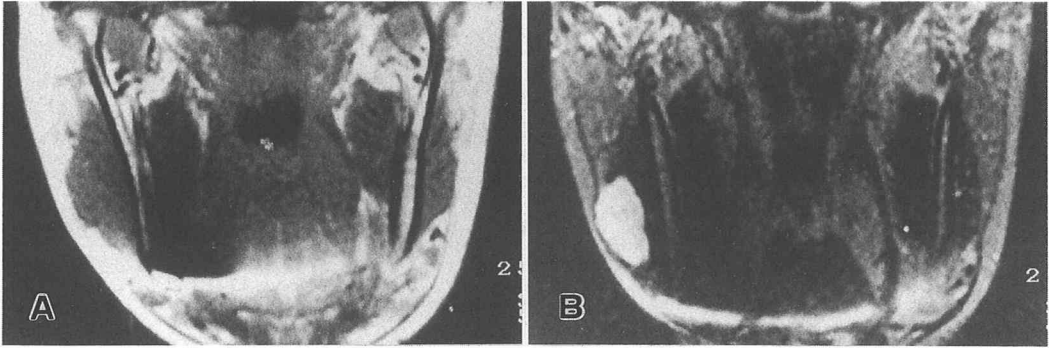


写真3：A；MRI T_1 強調像
B；MRI T_2 強調像